

博士学位論文審査要旨

2021年1月28日

論文題目： 明治青年僧の「探検」とは何だったのかー能海寛の資料を通じてー

学位申請者： 篠原 由華

審査委員：

主査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	錢 鷗
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	村田 雄二郎
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	富山 一郎

要 旨：

本論文は、明治期に中国四川、青海、雲南からチベットへの探検を試み、道半ばにして挫折した能海寛の思想と活動を、未公開資料を含む新たに発見された多くの文書をもとに考察するものである。能海については、チベット探検との関わりで、これまでも基礎史料の整理やある特定の角度からする研究や紹介はあった。だが、本研究は十九世紀末から二十世紀初頭における世界的仏教の位相、近代日本の仏教革新運動、中央アジア探検運動、チベットの位置とヨーロッパ帝国主義の勢力拡大と相まって骨軸が太くなった西欧文明論と東洋学との葛藤など、広い領域と極めて複雑な事象を視野に収めつつ、一青年仏教徒探検家の中国大陸体験を「明治日本」「清末中国」という地域の歴史的文脈と時代性の中で考察するものであり、能海研究としては初めての本格的な伝記と言ってよい。

本論文は序章と終章を入れて全部で六章から構成され、補論と付録を収める。付録は、約二十ページからなる能海の残したテキストとその他の資料・地図等に著者が逐次注釈を付けたものである。

著者はまず補論「資料の来歴」で現在所存の資料の紹介だけでなく、その「来歴」と共に遥かなる中国の周辺地域から日本まで運ばれるまでの資料の歴史像を綿密に考証する。第一章「明治二十年代の仏教青年とチベット探検」は、能海の入蔵の動機が「大乘非仏」説への反発と新しい仏教を世界の仏教徒との連携で振興してゆく情熱にあったことを指摘する。それゆえ、能海にとってチベットに行くこと自体が最終目的では無く、仏教国を探検する営み自体に明確に宗教革命上の意義を見出していたと著者は主張する。そして学術思想史の視座から能海のチベット探検の思想的文脈、探検の動機の多層性を丁寧に分析し、仏教革新運動思想史における能海の位置を明らかにする。第二章「四川に集まった日本人とチベット」では、能海の第一回チベット探検の行程を、これまで十分に用いられてこなかった史料を駆使しながら考察し、現地でチベット関係の歴史的記述や地理的情報を精力的に収集し、チベットと清朝内地の間に広がる地域の複雑性への認識を深めていった能海の姿を描き出す。第三章「探検における交遊録」は、能海の成都や重慶における具体的活動や人間関係を通じて、その探検準備の実態と意義、彼が築いた幅広い人的ネットワークとはなにかを詳考した白眉の篇となる。時代と社会に影響されず仏教だけを追求したというナイーブな既往の人物像を否定するとともに、探検する学者という枠組みだけで見えて来ないものとはなにかという問いを提起したことは、本論文の大きな価値である。もちろん、能海の探検は日清戦後の日中関係の新たな変化とも無関係ではないことを指摘することも忘れない。第四章「仏教徒の探検」は、遺されたメモ書きや書簡などから能海の移動の足跡と思想変容

のプロセスを明らかにする。具体的には、チベットと中国の仏教に対して探検前に抱いていたイメージと現地考察で得られた現実とのギャップを考察し、そのギャップの中から生まれた「西藏研究倶楽部」という、本格的な仏教徒の団結を図る実践的な構想を検討する。それによって、決して予定通りには進まない探検の中でも、奮闘し続けた能海の姿を浮かび上がらせたのみならず、仏教の過去と現在の両方を見つめ続けた能海の探検の独自性を明らかにした。これはこれまでの能海の探検を取り上げた先行研究にはない斬新な視角であり、興味深い結論である。

審査会では、能海の思想と活動に関して、膨大な一次資料をもとに丹念な分析と考察を加え、独自の議論を注意深く展開した手法が高く評価された。一方、能海にとって仏教の「信仰」が自身の思想や行動のなかでどう位置付けられていたのか必ずしも明瞭ではなく、人物の繋がりが多層性から時代性をより深掘りすべき点について、若干の質疑がなされた。また、わずかな箇所ではあるが引用の仕方を正すべき点もある。まだ再検討を要する箇所があるものの、資料にそくした本論文の篤実な分析手法は、能海寛についての初めての本格的な伝記研究として高く評価されるものである。よって、本論文は、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2021年1月28日

論文題目： 明治青年僧の「探検」とは何だったのかー能海寛の資料を通じてー

学位申請者： 篠原 由華

審査委員：

主 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 錢 鷗

副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 村田 雄二郎

副 査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 富山 一郎

要 旨：

学位申請者である篠原由華氏に対する総合試験を、2021年1月25日（月）15:00から16:30まで、同志社大学志高館 SK117 にてオンライン遠隔形式で実施した。申請者によるプレゼンテーションは約40分、審査委員と申請者による質疑応答は約50分であった。学位申請者は、本論文の問題意識、分析方法、関係する既存研究の特徴、具体的な考察内容、研究の主な達成点を丁寧に説明し、審査委員からの質問に対して概ね的確に答えた。また、本研究の学術的意義と今後の課題についての説明も説得力があった。

本論文の主要な部分は、査読付の学術雑誌で複数発表されており、国内外の学会においても報告され、良い評価を得ている。さらに、本論文に膨大に扱われている明治期の手書き文書と漢文並び現代中国語文献も的確に解説していることが確認された。また、日中近現代史、明治仏教思想史、チベット探検史、近代の通行証制度などの知識も優れていることが確認できた。よって、審査委員一同は、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

論文題目： 明治青年僧の「探検」とは何だったのか
—能海寛の資料を通じて—

氏名： 篠原 由華

要旨：

本稿は明治 31 (1898) 年から 34 年にかけて中国大陆からチベットを目指した日本人僧侶能海寛に注目し、彼が生涯をかけて追い求めた「探検」とは何だったのかを考察するものである。

能海は明治元 (1868) 年中国山地の山間にある島根県那賀郡波佐村 (現在の浜田市金城町長田) の真宗大谷派浄蓮寺に生まれ、普通教校、慶應義塾、哲学館へ進学し、反省会や海外宣教会といった仏教革新を目指すグループに参加した。その中で能海は世界規模の仏教徒の連携を提唱した。特に世界で広く利用される英語の影響力に注目し、仏教經典の英訳を進めようとした。その際、音訳の漢訳經典よりも釈迦の説いた言葉に近いと言われていたサンスクリット語經典に注目し、それがあつチベットへの探検を志すようになった。そして明治 31 (1898) 年中国に上陸すると、いずれも失敗に終わったものの、チベットに向けて三度の探検を行った。第一次 (四川)、第二次 (青海)、第三次 (雲南) の各探検である。第三次探検で消息が途絶えるまで、日本に書簡や日記、スケッチなどを送っており、その一部が昭和 61 (1986) 年以降生家浄蓮寺で発見された。その数は 3000 点にのぼると言われる¹。これら資料は、地元の能海寛研究会によって『能海寛著作集』 (全 15 巻 USS 出版 2005 - 2010 年) に収録された。

これまで能海については個人史的研究をはじめ、チベットと日本人の関わりに言及する研究や近代仏教史研究、探検史などで紹介されてきた。そこでは主に能海が存在を有名にした探検は、大乘非仏説によって実行されたものとして指摘されてきた。ただ、能海が大乘非仏説からどのようにして影響を受けたのかなど踏み込んで探究されることはなかった。その結果、同時代史の中での位置付けが十分に行われているとはいいがたく、社会的影響を受けない仏教だけを追い求めた人物というイメージが形成、継承されてきた。こうした状況は、新たに発見された資料をふくめ、参照できる資料を可能な限りつき合わせることで克服できると考えられる。

また本稿は能海自身がそう呼んでいたように、能海がチベットを目指した行為を「探検」と呼ぶ。探検を呼びかける文章の中で、能海は探検を「今日社会の流行語一大風潮物」とし、それを「仏教徒の業に移し得べきもの」と言った²。当時福島安正や郡司忠成が探検を敢行したことを機に、日本国内では「探検」に関する議論が活発に行われ、殖民とともに使われていた探検の概念が、学術という新しい在り方を獲得していったと言われている³。そうした中で仏教の業に移した探検を提唱した能海は、仏教徒が当時流行していた探検を行う意味を見出していたと考えられる。能海が考えた「仏教徒」の行う「探検」を問い直すことで、従来注目されることのなかった近代における宗教家、仏教徒の行う「探検」を提示することができるのではないと思われる。

上記のような考えから本稿は二つの課題を設定した。まず一つに、参照可能な資料を可能な限り参照し、能海から時代性を引き出すことである。そして能海がどのような環境の下、探検を志し実行していったのかを具体的に明らかにすることを目指す。次に探検の多義性を示すことであ

¹ 隅田正三『新仏教徒運動の提唱者 求道の師 能海寛』(波佐文化協会 2018 年) p48。

² 能海寛『世界に於ける仏教徒』(哲学書院 1893 年) p54。

³ 鈴木康史『冒険と探検の近代日本—物語・メディア・再生産』(せりか書房 2019 年) p36-80。

る。仏教徒の探検を提唱した探検前から能海のことを追うことで、地図上の空白から学術探検という近代日本における探検の系譜では網羅されていない第三の探検を示したい。特に仏教徒という立場が近代的な探検との関わりを考察する。これら作業を通じて、明治の青年僧能海寛が追い求めた探検が何であったのかを明らかにすることを本稿の目的とした。

この課題を克服するために、本稿は以下四つの章から能海の探検を問い直そうとした。まず第一章「明治二十年代の仏教青年とチベット探検」では、『世界に於ける仏教徒』やメモ類を使いながら、チベット探検を志すようになった背景を追った。日本仏教の改革をうたう青年グループにいた能海は、チベット探検を仏教の革新へ向けた計画の準備の一つとして位置付けていた。その中で探検を宗教学などの諸学問と同じく信仰のための手段、あるいは世界の仏教徒の団結を促すものとして捉えられていたことが分かった。能海がチベットに関心を抱くようになったのは、反省会や海外宣教会などを通じて欧米の仏教徒の情報に触れたことがきっかけだった。そして海外伝教の必要性を認識するようになり、経典の英訳に着手し、そのために経典原本を求めるようになった時期に経典のある場所としてのチベットが現れたのである。ただ当初は探検の必要性は唱えていても、自ら行くことは考えておらず、チベットに入ろうとする者が頓挫する様子を見てようやく自ら探検に出ることを決意したのだった。また地理学や人類学といった仏教以外の諸学問への関心やチベットを取り巻く不安定な国際情勢、さらに戦勝に沸き立つ国内の気運といった仏教界とは一見関わりが無いように映る領域から受けた影響も、チベット探検へ向かう能海の背中を押したことが分かった。チベット探検決意までの背景を追うことで、能海はチベット探検に対して学問と宗教革命上の二つの意義を見出していたことが明らかとなった。

第二章「四川に集まった日本人とチベット」では、最初に実行した第一次探検の四川省での動向を整理した。日本政府から派遣された成田安輝と大谷派僧侶寺本婉雅とともにチベットに挑もうとした第一次探検は、能海の探検の中で最も有名だが、四川省とチベットの境界地域でなぜ断念せざるを無くなったのか明らかとなっていなかった。そこで本稿は能海の日記や書簡に加え、成田の外務省への報告書と寺本の日記を用いることで三者の動向を整理していった。能海は成田とチベット入りを目指す時期が重なったことで、紹介状や護照を手に入れたりするなど便宜を受けることができた。特に通常交付されないチベット入りを認める護照は教案の混乱に乗じて交付された。能海はダルツェンドで寺本と合流しチベットを目指すことになったが、日本人であることを明かすかどうかを巡って意見が対立した。結局日本人であることを公にして進むことになったが、国際的に危機的状況に陥っていたチベットでは、強い警戒心を持っており、護照を持ち日本人としてチベットに入ろうとする能海たちが受け入れられることはなかった。以上の過程を辿ることで、ダルツェンドに到着した能海は、出使日記やチベットの地誌から現地の地理や歴史、政治情勢などを把握し独自に地誌を作成していたことがわかった。その後合流した寺本との意見の対立は、同地で集めた情報によって能海がチベットと中国の間に広がる地域の複雑さについて理解を深めたからだと考えられる。

第三章「探検における交遊録」では、探検中の能海の周囲にどのような人物がいたのか明らかにした。上陸した上海から重慶までの過程では、在留日本人を訪ねたり、日本に関心を持つ中国人から助けを借りたりしながら歩を進めた。日清戦争後の日中間では、実業家の進出、留学生や教師の派遣、受け入れが行われるなど、双方間の人的往来が活発になり、互いへの関心が高まっていた。こうした戦後の日中関係の変容、活性化は、人脈や情報という点で中国大陸の東方から西方へと向かう能海にとって追い風となったことがわかった。

そして第四章「仏教徒の探検」では、探検することでもたらされた認識や目的の変化を探ろうとした。チベットに加え、探検すべき仏教国として認識されていた中国仏教を対象に、探検前と探検中の認識をそれぞれ捉え、探検という経験がその後のチベットに対する接近方法へ与えた影響を見ようとした。探検前の能海が中国やチベットに対して持っていた認識は、実際のところほとんどその通りではなかった。現存する資料には「振るわない」と書かれていたり、怒りとも読め

る厳しい評価が散見されたりするなど、中国仏教とチベット仏教に対する能海の受け止め方はそれぞれ異なりながらも、能海の期待に添ったものではなかったことがわかる。しかしその評価の根底には、「新仏教」という理想の仏教の姿があり、それにはどの仏教も「新仏教」に向かって進化するものという前提があったように思われる。このような独りよがりな価値観に由来する能海の仏教革新プランは、探検という実態を実見する経験を通じて、修正を余儀なくされたと考えられる。二度の探検の後に構想された「西藏研究倶楽部」は、研究対象や事業内容などから探検中の気づきが反映され、また仏教徒との団結という探検前より唱えていたことを実現するような内容だった。探検を通じて能海が認識したチベットの実態に応じて、チベット研究のあり方を模索した形跡が窺えるのである。

岐路に立たされた日本仏教界で生まれた能海のチベット探検は、欧米から流入する諸概念や学問、また日清戦争後の東アジア情勢やグレートゲームの影響を受けながら展開されていた。そして能海の唱えた仏教徒の探検とは、探検という当時の流行物に、仏教革新運動や学術への対応といった仏教界の課題の解決を盛り込んだものだった。またこれらの課題を探検に盛り込んだ能海は、過去と現在の両方の仏教を見つめ続けたと言える。それは探検に付随する帝国主義やナショナリズムなどの諸概念に加え、仏教徒という属性が大きな作用をもたらし、まなざしや志向へ影響を及ぼしたものと考えられる。